OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	元禄期の節用集について
Author(s)	米谷, 隆史
Citation	語文. 1997, 69, p. 13-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68917
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

元禄期の節用集について

米谷隆史

一、はじめに

慶長年間に刊行された易林本節用集（以下、易林本と称する）の所収語は、「詩文等に用ゐる語が比較的多くして通俗の語は割合に少い」ものであった。[1]にもかかわらず、その所収語の大部分を踏襲するに過ぎない節用集が、その後も長く版本の節用集の主流を占めていったのである。しかし、元禄期を境にして、易林本の流れをくむ節用集の版行が次第に少なくなり、それ以外の形式と内容を有する節用集との交替がみられるという。[2]この時期に新たに編纂された節用集には次代の要求を充たすところがあったのであろうか。元禄七年刊行の西鶴織留の巻一には「節用集に見えわたらぬ難字を庄屋殿より度々たづね」られて苦心する手習い師匠が登場する。この記述は節用集が庄屋層にまでひろく参照されるようになったことをも示唆している。このような時代を迎えて節用集の所収語は従来のままであったのだろうか。

また、元禄期に先立つ寛文年間から貞享年間にかけては、頭書に見出語についての注を配する寛文一〇年刊の頭書増補二行節用集、多くの編纂資料を参照して大規模な増補をした延宝八年刊の合類節用集や新刊節用集大全、古本節用集永禄十一年本類を参照して増補を行った寛文五年刊の真草二行節用集（以下、寛文増補本と称する）、寛文増補本に若干の増補改編を加えた延宝四年刊の増補二行節用集（以下、延宝増補本と称する）、延宝増補本にさらに合類節用集や新刊節用集大全を参照して増補を行った貞享三年刊の広益二行節用集（以下、広益二行本と称する）等の新しい節用集が開版され始めた時期である。これらの節用集のどの部分を受けて元禄期の節用集は編纂されたのであろうか。以上のような問題を考えるために、本稿では元禄期に版行された節用集諸本の所収語[3]を比較し、あわせて、系統の分類を行うものとする。

本稿での調査範囲は、辞書本文の「い」部と「あ」部の所収語を中心とした。新しい節用集を売り出すにあたっては、従来の節用集よりも優れていることを明示する必要が存するが、「い」部則ち巻頭部分が最も違いが明確に打ち出されやすい部分と考えられるからである。「あ」部は、「い」部からは窺うことのできない系統関係が存する場合を想定して参照することにしたもので、こちらの方は辞書の後半部分である程度の所収語数があるということによる。また、頭書部分であってもいろは分類のなされた語彙集の部分には検討を加えることとする。

なお、各書の引用に際して、異体字は多く現行の字体に改め、割

書は〔　〕内に示すものとする。また、語の一致の認定に際しては字形や語形の小異は無視することとする。調査は影印やマイクロフィルムがあるものはそれを参照し、不鮮明な部分は原本によって確認することとした。

二、対象とする節用集

佐藤貴裕氏作成の資料[1]から、刊記などによって元禄期に版行されたものと思われる節用集諸本を抜き出すと次のようである（〈　〉内に刊年を記したものは拙蔵本で、刊記や奥付の欠落しているため、年代記等の最終記載年によって刊年の上限を推定したものである）。

イ、頭書大成節用集　元禄二　八　一〇　一一
ロ、頭書増補節用集大全　元禄二　四　五　七　八　一三
ハ、頭書増補節用集綱目　元禄二　六　七　八　九
ニ、二体節用集　元禄二
ホ、頭書大益節用集綱目　元禄三　亀田文庫蔵
ヘ、節用集　元禄三
ト、大極節用国家鼎宝三行綱目　元禄三　前田富祺氏蔵[5]
チ、頭書大広益節用集　元禄四　亀田文庫蔵
リ、世話字節用集　元禄五
ヌ、大海節用和国宝蔵　元禄六　亀田文庫蔵
ル、大広益節用集　元禄六　玉川大学蔵
ヲ、広益字尽重宝記綱目　元禄六
ワ、大広益節用集　元禄九　上田市立図書館蔵
カ、頭書増補節用集　元禄九
ヨ、頭書増字節用集大成　元禄一〇　亀田文庫蔵
タ、頭書増補大大節用集　一六　刈谷市立図書館蔵
〈元禄一〇〉
レ、頭書増補大成節用集　元禄一一　亀田文庫蔵
一二　亀田文庫蔵　一三
ソ、新大成増字万宝節用集　〈元禄一一〉[6]
ツ、三才全書俳林節用集　元禄一三
ネ、万宝節用集　元禄一四　広島大学蔵
〈元禄一六〉
ナ、大大節用集大家蔵

このうち、イ、ロ、ハの系統の諸本については高梨氏の論考に言及が存するので本稿ではそれを参照することとした。また、ヌは、唯一実見できた亀田文庫蔵本が、元禄六年開版とする刊記こそ有するものの、年代記の記載は宝永七年までくだっていることから本稿では対象としなかった[7]。また、リについては、既に古屋彰氏によって和語対類等との関係が明らかにされていることと、節用集という名を有するとはいえ意義分類がなされるのみの小規模な書であることから、同じく、ヲとツについても合類節用集との関係が先学によって明確にされていることから省略に従った[8]。なお、それ以外に本稿で所蔵を示していないニ、ヘ、カとレの元禄一三年刊本は未見である。

対象とした節用集を辞書本文の所収語によって分類すると以下のようである。

①イ　ロ　ハ（以下、頭書増補本と称する）
②ホ　ト（以下、三行本と称する）
③チ　ル（以下、大広益本と称する）
④ワ　ヨ　タ　レ　ソ　ネ　ナ（以下、元禄改編本と称する）

結論を先取りした形で述べると、三行本以下の系統の節用集はいずれも、頭書増補本と広益二行本の所収語を中心に編纂されているようである。したがって本稿では三行本以下の各系統については、刊年が最も早いホ、チ、ワの「い」部と「あ」部の、a所収語数、baのうち頭書増補本の所収語と一致する所収語数、caのうち広益二行本の所収語と一致する所収語数、daのうち頭書増補本、広益二行本いずれの所収語とも一致しない所収語数、を示しつつ検討を行っていくことにする。なお、頭書増補本以外の節用集はいずれも「い」部に「ゐ」部の所収語を含んでいる。広益二行本の「い」部の所収語は九四六語、「あ」部の所収語は九五四語であり、頭書増補本の「い」部と「ゐ」部の合計所収語は四六七語、「あ」部の所収語は三九六語である。[9] 広益二行本は頭書増補本の元になった系統の節用集に増補を加えているため、頭書増補本の所収語のうち「い」部及び「ゐ」部の四一五語と「あ」部の三七五語は広益二行本にも収められている。したがって、いずれかの節用集を参照しているか否かは、重出していない語がみられるかどうかということと、語順の一致の度合によって判定されることになる。また、頭書増補本に増補を加えうる節用集としては易林本や合類節用集、新刊節用集大全も注目されることから、これらの先行の節用集を参照しての増補があるかどうかも確認していくことにする。

三、編纂資料の考察

①頭書増補本　イ　ロ　ハ

寛文一〇年刊の頭書増補二行節用集に始まる系統の節用集である。易林本の内容に若干の増補改編を加えながらも、大局的には所収語の削減を以て推移してきた近世初期節用集の代表的な系統である。元禄期に辞書を編纂しようとする際は、まずこの系統の節用集をいかに増補改編するかが問題になったことであろう。

高梨氏の報告によると、この系統のイ、ロ、ハの所収語はいずれもほぼ同じである。旧来の節用集の所収語を受け継ぐこの系統の節用集が元禄期においてもなお大きな位置を占めていたことは注目すべきことであろう。易林本節用集から三割ほど所収語を減じているとされるこの節用集が使用者にとって十分なものであったのか、また、十分とはいえないまでもある程度は役立つとみられていたとするならば、いかなる使用目的が想定されるのか。近世節用集の研究においては、増補改編の位置づけとともに、同じ所収語の節用集が版行され続けたことの意味についても今後検討される必要がある。

さて、この頭書増補本の系統の中でも、元禄五年刊の頭書増補節用集大全は、高梨氏が、「い部の乾坤門と言語門に集中的な増補がある」延宝四年初刊の増補頭書両点二行節用集と「同じ増補項目群をもった節用集」であると述べており、注目される一本である。ここで述べられた延宝四年刊本と元禄五年刊本は筆者未見のため、[10] いま、架蔵の貞享四年刊、増補頭書両点二行節用集（以下、頭書両点本と称する）によってその「増補項目」を確認すると、高梨氏の言及の通り、「い」部には頭書増補本に見られない語が乾坤門に六五語、言語門に九八語見られる。これらの語はいずれも寛文増補本の系統の節用集から増補されたもののようである。初刊の年次を勘案すると、寛文増補本と延宝増補本が増補資料の候補となるが、頭書両点本と延宝増補本の「い」部乾坤門に「印南野（いなみの）」とある語を寛文増補本が「市南野（いちなみの）」とすることや、同じく乾坤門に「五十狭（いさ）」とある

語を寛文増補本が収めないことなどから、延宝増補本のような節用集が参照されたものと考えられる。最も参照の頻度の高いと思われる言語門とともに、乾坤門にも増補がされていることは、目につきやすい巻頭部分に増補を加えることで従来の節用集との差異を購買者に意識させるという目的があったものと考えられる。増補された語に歌枕とされる地名が多いことも注目しておくべきであろう。

②三行本　ホ　ト

トはホの入木改題本であることから、所収語は同一である。ここでは、刷りの状態からトに先んじて版行されたとみられるホによることにする。

「い」　a四〇七語　b二九三語　c三八九語　d　四語
「あ」　a六六三語　b二九七語　c六二一語　d三七語

この節用集は苗村丈伯の編纂にかかる。従来の真草二行に、篆字（古文）を加えた三行によって所収語を掲出する点に特徴が存する。また、言語門の凡例で「和俗の世話字ことゝ〳〵く補」之誹諧の漢和狂詩狂聯句に便あらんがためなり」と述べることは、この節用集の増補が何を目的としたものかを示すものとして興味深い。(11)

所収語は「い」部では頭書増補本よりも一割以上少なくなっているものの、「あ」部では逆に七割ほど増加している。「い」部よりも「あ」部の増補が多いのは本稿でとりあげた節用集の中でこの節用集のみである。「い」部の所収語数が少なくても篆字を示すという形式によって従来の節用集との差異が十分明確であったということも関連するのであろうか。

頭書増補本の「い」部の所収語は六割強、「あ」部の所収語は七割強収められていることになるが、いずれの部においても三行本の所収語を網羅するには至っていない。一方、広益二行本の所収語は「い」部で四割強、「あ」部で六割強が収められており、これで両部とも三行本の所収語の九割強を占める。のみならず、両部ともに語順の上でも広益二行本と一致するところが多いのである。一致する語の中には、「い」部乾坤門所収の「出石」等の延宝増補本の段階では収められていない語も見えていることから、三行本は広益二行本を主たる編纂資料としたものと考えてよいであろう。頭書増補本は、その所収語から広益二行本には収められていない「鯵」（乾坤門）等の語が引用されているものの、参考程度に参照されたにすぎないものと考えられる。

頭書増補本、広益二行本の両書に一致を見ない語についてみると、広益二行本の「生田浦（摂州）」（乾坤門）に対して三行本に「生田」（乾坤門）、とあるように部分的な一致が確認できる語が「い」部と「あ」部あわせて七語存するが、残りの三四語は他の資料によって増補した語と考えられる。このうち、易林本以下の他の節用集いずれかの所収語と一致するのは一七語にすぎない。

この節用集の序文には「予往年節用集に頭書し後又文字を廣益し梓に鏤て世の一助とせしもなを拾ひ遺の再益なきにあらず」という記載がある。丈伯が「文字を廣益し」た節用集は木村秀次氏によって、広益二行本のことと推測されている。(12)木村氏の推測通り広益二行本が苗村丈伯の編纂にかかるものであるとすると、丈伯は自らの節用集をさらに改編してこの節用集を編纂したということになる。

また、丈伯の編纂した元禄六年刊の小篆増字和玉篇綱目の序文に

は「和玉節用之二書如三鳥有二両翼一　如三車有二両輪一　不」可」離也」とあり、往年編纂したこの節用集に和玉篇を加えることによって、「羽翼成輪輻湊」ものであると記されている。後述するル、ワ、ネの節用集は頭書に和玉編を配しており、丈伯の構想は後に一書のうちに実現したことになる。

③大広益本　チ　ル

「い」部　a七三四語　b三九七語　c七一七語　d一三語

「あ」部　a三九八語　b三九六語　c三七五語　d　二語

チとルの所収語はほとんどが一致しているといってよいが、「い」部でチの時候門所収の「往古」をルが「往昔」とし、ルが言語門に「一徹」等の三語を増補していること、「あ」部ではチの草木門所収の「朝顔」をルが「朝皃」としていることなどに加えて、語順にも小異がある。(13)

この節用集は、「い」部と「あ」部とで主たる編纂資料が交替をみせる。頭書増補本の「い」部の所収語は八割強が収められていることになるが、大広益本の所収語の五割強を網羅するのみである。一方、広益二行本の所収語は七割強が収められており、こちらは大広益本の所収語の九割強を占める。さらに、広益二行本は語順の上でも一致するところが多いのである。また、一致する語の中には、「生駒山（三洲）」（乾坤門）のように延宝増補本の段階では収められていない語も見えていることから、「い」部は広益二行本を主に参照して編纂されたものと考えてよいであろう。頭書増補本は、広益二行本には収められていない「蹉」（乾坤門）等が引用されているものの、参考程度に参照されたにすぎないものと考えられる。なお、「い」部にみられるチとルの相違する点を広益二行本と比較するとチと一致する点が多いことから、節用集本文の編纂も刊行年の順番と同じくチがルに先立つものと考えられる。

広益二行本に大部分を拠っている「い」部に対して、「あ」部は、語順に小異が存することと、言語門末尾に二語の増補があることを除くとほとんど全く頭書増補本と同じといってよい。この節用集では、巻頭から後の部にいくにしたがって、頭書増補本をそのままに引用するところが多くなっていくのである。(14)「い」部における広益二行本の増補は全ての門にわたっていることから、増補が乾坤門と言語門に限られる頭書両点本と直接関係するものではないと考えられるが、巻頭部分を中心に増補を加えて、先行の節用集との差異を打ち出そうとした意図は同様であろう。

頭書増補本、広益二行本の両書に一致を見ない語はチで「家童子」（人倫門）等、「い」部と「あ」部あわせて一五語存するが、易林本以下の節用集いずれかの所収語と一致するのは七語のみである。

④元禄増補本　ワ　ネ／ヨ　ソ／タ　レ　ナ

「い」部　a四七五語　b二一八語　c三四七語　d一二三語

「あ」部　a四三九語　b二五四語　c三六四語　d　五五語

ワ以下の七本は、後述のように所収語や語順に若干の異同が存するが、「い」部と「あ」部ともに九割強の所収語を共有していることから、一系統をなすと考えられる。

この系統の節用集の本文（頭書や門末に明確に増補語であることを明示して掲出している語を除く）は内部でさらに斜線で区切った通りの三類に分類される（以下それぞれ、ワ類、ヨ類、タ類と称し、

引用はそれぞれワ、ヨ、レによる)。まず、各類内部での関係であるが、ワ類及びタ類はそれぞれ所収語から語順まで同一であり、ヨ類は語順に小異こそ存するものの、ソがヨには収められている「い」部人倫門の「逸民」と「あ」部言語門の「案煩」を逸する以外は同じ所収語を有するなど、いずれも異同はきわめて少ない。一方、各類の間の関係は複雑であるが、おおむね、タ類が比較的開きが大きいワ類とヨ類との間に位置すると考えられる。ワ類「あ」部言語門の「相對」「有難」をヨ類及びタ類が「相對仕」「有難存候」とすること、ヨ類が「い」部の乾坤、時候、神祇、人倫、名字、食服、言語の各門末にワ類及びタ類には収められていない語を数語ずつ有することなどが各類を分かつ特徴である。

さらに、これらの三類はそれぞれ次のような本文の不整合を有する。

ワ　石窟(ママ)―降(あまくだる)―野(あまの)　秋津嶋(あきつしま)　天地(あめつち)―下(あめのした)　―
ヨ　天地(あめつち)―下(あめのした)　―石窟(あまのいはや)―降(あまくだる)―野(あまの)
　　「あ」部乾坤門
ヨ　聳雪(あまるゆき)同　丸雪(ママ)　(間に二七語)　霰(あられ)
　　「あ」部乾坤門
ワ　タ　聳雪(あまるゆき)　霰(あられ)　丸雪同(ママ)
　　「あ」部言語門
タ　猿(ママ)　有増(同)　(間に一六語)　荒(ママ)
ワ　ヨ　荒猿(あらまし)　有増(同)

これらのことから、本文が編纂された順序は単純には判断できず、先後関係は必ずしも明確ではない。あるいは三類に先行する一本を想定する必要もあるかもしれない。それゆえ、以下の検討は刊年の早いワ類を中心とするものの、他の二類も随時参照していくことにする。

ワには、頭書増補本の「い」部の所収語が五割弱、「あ部」の所収語が六割強収められていることになるが、元禄増補本の所収語を網羅するには遠く及ばない。一方、広益二行本の所収語は「い」部「あ」部とも四割弱が収められており、こちらは元禄増補本の「い」部の所収語の七割強、「あ」部の所収語の八割強を占めており、語順の上で明確な一致が確認できる部分も存する。しかし、両本によって網羅できない所収語が「い」部で三割弱、「あ」部で一割強存する。これは割合の上でも語数の上でもこれまでの系統のなかで最も高い数値である。これらの所収語のなかには、大広益本のチが頭書増補本や広益二行本以外から増補していた「い」部の一三語のうち人倫門の「家童子」等一〇語が、「あ」部の二語は言語門の「行者」「跡職」がともに見られることから、編纂資料として大広益本系統の節用集も参照された可能性が高いと考えられる(チとルが相違する箇所については、チとの一致が顕著である)。なお、残りの一六語のうち、易林本以下のいずれかの節用集の所収語と一致するのは四一語にすぎない。

先行の節用集にはみられない語のなかには注目すべき語が多くみられる。「い」部言語門の「一厘」「一毛」や、先に触れた、ヨ類及びタ類の「相對仕」「有難存候」などである。これらは明らかに書簡や文書で使用される語を参考にして所収語としたものであろう。この他にも、三類のいずれにもみえる「相渡」「相済」「預手形」「預銀」「被遊」なども文書や書簡で頻用される語といってよい。また、これらと同様のものとは断言しがたいが、「い」部の言語門

に「言唆」以下、「言―」の語構成の語が六〇語も増補されているのも注目される。[15] 元禄期より後の節用集の大部分はこの語群のなにがしかを受け継ぐことになるのである。

以上のような語が本文部分に増補されているのとは別に、ソの頭書には「書状書初書留 文章高下付 替詞字類」として、「愈弥」の言い換えとして「増々 益倍弥以弥増 偏一入」を示すなどのように、書簡用語をいろは順に掲出し、その類語や使用上の区別を記す部分が存する。この部分は先行の往来物からの転載かとも考えられるが、本文部分への増補語とあわせて、この時期の編纂者が想定した節用集の使用目的を窺わせるものといえる。

この系統の節用集には、さらに、ヨの頭書に「増字大全」、ネの頭書に「大増字大成」としていろは分類と意義分類のなされた増補語が配され、ソにも各門の末に(増)、(補)、(益)などとして増補語が収められている。[16]「増字大全」と「大増字大成」は同じ内容である。ソの門末の増補語も若干の語の出入りは存するものの「増字大全」を参照していることは明らかである。この「増字大全」は所収語、語順ともに字尽重宝記によく一致する。また一致する語のなかには、合類節用集から字尽重宝記が編纂される段階で増補された「居守印」等の語もみられることから、「増字大全」は字尽重宝記の所収語を抄出して編纂したものと考えてよいであろう。

以上述べてきたように、この系統の節用集は元禄期の節用集のなかで最も独自に内容を増補した節用集といえる。なお、山田忠雄氏による『開版節用集分類目録』を参照すると、元禄期より後もこの系統の節用集の版行は続いているようである。

四、まとめ

以上、本稿では元禄期に増補改編された節用集諸本についてその編纂資料と系統を考察してきた。延宝期の合類節用集や新刊節用集大全が節用集以外の編纂資料をも駆使して大規模な増補改編を行っていたことと比較すると、元禄期の節用集はいささか新たな展開に欠けるようにもみえる。しかし、いくつか注目すべき点は存する。

まず、古本節用集永禄十一年本類によって増補した系統に連なる広益二行本が主要な増補資料として盛んに参照されていることである。従来、易林本以降の版本の節用集には古本節用集の所収語はそれほど受け継がれなかったとされてきた。しかし、古本節用集のなかでも比較的多くの所収語を有する永禄十一年本の所収語は、広益二行本を通してという間接的な形でこそあれ、元禄期の節用集にも受け継がれたということになるのである。新刊節用集大全が同じく永禄十一年本系統の古本節用集を参照していたことも考えあわせるならば、古本節用集の所収語であっても近世の節用集に求められた部分はかなり受け継がれたものと考えてよいのではなかろうか。

また、従来の節用集の所収語を受け継ぐ流れの一方で、元禄増補本のように、書簡や日常文書の用語など、従来の節用集には見られない語も比較的多く収める節用集諸本が台頭してくるのもこの時期である。元禄期でも早い時期に版行された三行本が広益二行本の抄出本とでもいうべき性格を有し、その凡例に「誹諧の漢和狂詩狂聯句に便あらんがため」と記すことと比較すると、元禄増補本はその使用目的の幅を通俗の用の方向にもやや広げたものと考えられる。学芸に関わる要請によって増補されることがほとんどであった節用

集は、書簡文例や文書の雛形などの付録が合冊されるようになるこの時期、所収語の面でも新たな展開をみせつつあったのである。もちろん、このような変化が、従来の節用集も通俗の用に参照されることがあったがゆえに工夫された結果であることも忘れてはなるまい。

ただし、通俗の用にも対応するようになったとはいえ、節用集の所収語が学芸に関わる面を失っていったと単純に考えるわけにはいかない。時代はやや下るが、享保六年刊行の文林節用筆海往来所収、書札教訓状の次の記述は示唆にとむ（引用に際しては句読点を補い、傍訓の一部を省略した）。

一、文才有之ともがらはその才をはたらかせて言を巧に古語旧文を引、平生人のしらざる文字並ニものの異名を書を以てみづから至れりと思へり。當流には是を用ひず、只なだらかに讀やすく言の然もいやしからぬを第一とす。去ながら、むかしより用ひ来りたる異名古語をすつべきにもあらず、其人躰によるべきか。假ば法躰の隠者、風雅の好士などの書状をまつさら訴状請状などのごとくなるもりちぎ過たるなれば、同輩より以下には少こぼしたるもにくむまじきなり。（以下省略）

「訴状請状」のような公の文書に用いる語だけでなく、時には「異名古語」を駆使しようとする人々は決して少数ではなかったであろう。[17]合類節用集に由来する語が多い「増字大全」はこのような人々の要請にいささかでも答えようとしたものではなかったのだろうか。

近世節用集の特徴の一つとして、生活全般に関わる百科事典としての性格を認めるとするならば、所収語の面でその実現が模索され始めたのは、まさにこの元禄期だったのである。

注

（1）上田万年・橋本進吉『古本節用集の研究』（大正五年）三四六ページ

（2）高梨信博「近世前期の節用集　―四十七部非増補系諸本の系統関係―」（『辻村敏樹教授古稀記念　日本語史の諸問題』平成四年）以下、高梨氏の言及は特に注するものを除きこの論考によるものである。

（3）見出語と割書中の語で見出語に準ずる性格の語をあわせて所収語と称する。

（4）佐藤貴裕「近世節用集書名変遷考　―資料篇・付言―」（『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』四四―二、平成八年）、なお、佐藤氏は大万宝節用集増字大成について巻末が欠損する拙蔵本の年代記の記載から元禄一六年を一応の刊年として示しているが、拙蔵本と同版とみられる亀田文庫本の刊記部分に「寶永」の二字がかろうじて確認できることから本稿では対象としなかった。

（5）前田氏蔵本は巻一が残存するのみであるが、この節用集は後述のようにホと同じ内容であることから、国書総目録による元禄三年の刊年に矛盾しないと考え、ここに示すことにした。

（6）この本は、拙蔵本での最終記載年は元禄一一年であるが、山田忠雄『開版節用集分類目録』（昭和三六）掲載の山田忠雄氏蔵本は元禄一三年刊とされている。

（7）この本は、岡田希男氏の「元禄期の辞書界」（『立命館大学』三―八、昭和一三年）においても元禄六年刊として紹介されているが、岡田氏も亀田文庫蔵本によった可能性が高い。もちろん、元禄六年刊本があって、宝永七年に改修の上刊行されたという可能性も捨てきれないが。

（8）古屋彰「世話字尽」展望　―延宝から享保まで―」（『金沢大学文学部論集　文学科篇』四、昭和五八年）、小川武彦「「三才全書」俳林節用集」解説」（『青木鷺水集　第一巻』、昭和五九年）など。

（9）広益二行節用集は亀田文庫蔵本による。頭書増補本系統の節用集は多くの版が存するが、元禄期刊行のものは改行や改丁の際に語形や漢字表記に乱れを生じてしまっているものが多いことから、亀田文庫蔵、貞享四年刊頭書増補節用集大全による。

（10）亀田文庫にも元禄五年刊の頭書増補節用集大全は蔵されているが、

高梨氏の言及する本とは異なる。

(11) 高梨信博「近世節用集の序・跋・凡例（一）」（『国語学　研究と資料』一一、昭和六二年）にこの記述について言及がある。

(12) 木村秀次「寛文十年本「頭書増補二行節用集」について」（『馬淵和夫先生退官記念　国語学論集』、昭和五六年）

(13) 両書の所収語がほぼ同じであることは、既に、菊田紀郎「近世節用集の開版事情―大広益節用集を例に―」（『山形県立米沢女子短期大学紀要』二七、平成四年）が言及している。

(14) 主要な編纂資料が広益二行本から頭書増補本に移っていくのは「に」部以降のようである。

(15) これらのうち「言含（いひふくめる）」等の三語は頭書増補本や広益二行本の「ゆ」部言語門に収められている。

(16) 頭書増補本の中にも「増難字尽」として増補語を掲出する節用集が存するものの、その語数は全体でも「増字大全」「い」部の所収語数よりも少ない。

(17) 山田俊雄氏は『日本語と辞書』（中公新書、昭和五三年）のなかで、享保一五年刊の一代書用筆林宝鑑所収の書簡文例について、「「媚（こび）る」ことを決して拒まない」ことを述べている。

参考文献（注に示したものは除く）

佐藤貴裕「近世節用集の記述研究への視点―形式的特徴をめぐって―」（『国語語彙史の研究　一五』、平成八年）

山田俊雄「節用集改編ものの一例について　その一」（『成城文芸』七三、昭和五四年）

横田冬彦「益軒本の読者」（『貝原益軒―天地和楽の文明学―』、平成七年）

米谷隆史「『合類節用集』の編纂資料について」（『国語語彙史の研究　一五』、平成八年）

米谷隆史「新刊節用集大全の編纂資料をめぐって」（『国語学』一八八、平成九年）

初校に際して

本稿の提出後、高梨信博「近世節用集の一展開――四十七部系から四十五部・四十四部系へ――」（『国文学研究』一二三、平成九年）が発表された。系統の位置づけなどについて、本稿に先立って明らかにしている点も多い。あわせて参照されたい。